

## 鏡像少女

### 序章 とある女性から見た場合

休日のカフェはどこも混んでいる。ここが駅前で、人通りが多いこともその原因の一つだろうか。私が入ったばかりのときはまだあまり人もいなかったのだが、次第に列ができるほどに増えた。客層は主に若い女性で、くすくすという笑い声や明るい話し声が目立つ。それにしても周囲のカフェと比べて客が多すぎるのではないかと思っただが、そういえばこのカフェは先日ツイッターで拡散されていたと思っ出した。確か、チョコレートケーキが特に美味しいとかなんとか、曜日限定のケーキやお持ち帰りのクッキーがどうか、そうした書き込みだったはずだ。鮮やかな写真がツイッターの画像添付の限界である四枚すべてばっちり貼られていて目を惹いたため、適当にタイムラインを流し見していた私でも記憶に残っている。しかし、思い出すとこうして一人で時間を潰すには申し訳ない場所だ。電車の時間を間違えてしまったので暇潰しを強いられ、目についたお店に入ったのだが、私が入ったときは開店直後だったから人が少なかつたのだろう。運がいいのか、悪いのか。注文したチーズケーキを待ちながら雑誌を捲っていると、私の近くの席に、四人の少女達が座った。

「やったね、思ったより早く入れた」

「もうちょっと時間かかるかと思っただもんね。待つのも疲れるし」

「ねえ、鞆、こっちに置いとく？」

「メニニューってこれかな……あ、違う、こっちだった」

当然、不愉快というわけではなかった。ここは別に、静けさを売りにしている店ではない。どうやら親しい友人同士らしい彼女達はあれこれ

と喋りながら、ソファ側に座っている少女に鞆を渡したり、一人が広げたメニニューに額を寄せて揃って眺めたり、遠慮なく振る舞っている。その自由さが少女らしくて微笑ましい。彼女達はきつと、ツイッターを見て、並んででも食べてみたいと思っただろう。案の定、拡散された情報の一つでもあるチョコレートケーキという言葉を含んだ声が聞こえてきた。

「こことて確か、チョコレートケーキが人気なんだよね？」

「そうそう、確かに可愛いし美味しそう……でも他のケーキも普通に美味しそうじゃない？」

「ケーキいっぱいあるし、先に飲み物とか決めちゃわない？ みんなセツト頼むでしょ？」

「あたし、炭酸飲みたーい。でもケーキに合うかな、どうかかな？」

訊ねているようで訊ねていない、なんとも不思議なやりとりだった。ただ私の若い頃、学生時代を思い返すと、私もこうした喋り方をしていったような気もする。疑問形で会話をしている……でも言えはいいのか。いつだったか、夕食を食べながら手持ち無沙汰に眺めていたテレビ番組で、最近の若者はああだこうだと偉そうな出演者が言っていたが、歳を取れば誰しもが若い頃を忘れるものなので、あまり若者のことをとやかく言うものでもないなと思っただ。尤も、今と昔で情報量は違うので、私達の若い頃と今の若者の違いはそこに尽きるのだろう。

それにしても、彼女達を見るとテレビや雑誌の謳う流行りなどがよく分かる。チョコレートケーキを気にしていた少女は最近よく見るモデルと同じ髪型をしているし、使っているシユシユは、そのモデルが今月上旬に発売された雑誌の中でお気に入りアイテムだと紹介していたもの

永田 千晃  
(山本 淳子ゼミ)

だ。それを見つけたのは私だけではなく、彼女の向かいに座っている、飲み物を先に決めるよう促した少女も、「そのシユシユって」と話題にした。

「雑誌で見たよ、可愛いよね。わたしも欲しいかなって思ったんだけど」「あ、さすが！ 誰かは気づくと思ったんだよね。でも欲しいんなら買えばいいじゃん、多分、わたしより似合うと思うし」

「そんなことないって。わたしには似合わないかなって思ってたんだけど、たんだから。でもすごく似合ってる、しばらくそれ使いなよ」

少女達はメニューを放っておいてフアッションなどの話題に移ったようだ。やはり学生世代の少女達といえばフアッションやら恋愛やらの話題で盛り上がるという私の偏見はそれ実あまり偏っているわけでもないらしく、雑誌やテレビで見た着こなし、アイドルの衣装についての意見から、芸能人の熱愛報道、クラスの誰某が付き合っているとかいないとか、幅広く……あるいは一定のジャンル内の会話を楽しんでいる。ちょうど混んできたせいも、チーズケーキはまだこない。週刊誌も気になるところは読んでしまつて、あまりに暇なので、悪いことだとは思えないながらも彼女達の話聞き耳を立ててみることにした。とうの昔に年頃の少女ではなくなつてしまつたとはいえ、私も、その手の話が嫌いというわけではないのだ。炭酸を飲みたがつていた少女が、「カップルといえば」と言い出した。

「愛美って彼氏いるの？」

「え、なんで？」

「こないだ遅くまで塩田君と残つてたじゃん。あたし、忘れ物しちゃつて教室戻つたらまだ愛美達がいたから気を遣つただけ」

「あれは日直だったから、日誌とかいろいろ確認してただけ。彼氏とか、全然そんなの考えられないし」

「ほんとに？ まじで？ でも塩田君って愛美のこと好きって噂あつたんだけど、そのへんどう思う？」

問われると、エミと呼ばれた少女は「えー、どうだろう……」と言葉を濁した。おそらく、そのシオダ君とやらのことを悪くは思っていないのだろう。もしくは好意を抱いているか、好意を抱かれていることには

気づいているか。ただいずれにしてもはっきりとしない反応なので、考えたことがないというのも嘘ではなさそうだ。シオダ君がエミさんを好きでも前途多難らしい、頑張つてほしい。

「そういう比奈はどうなの？ 好きな人とかつて……」

「お、逃げる気かな？」

「愛美また逃げた、意気地なし」

「あたしは特にいませーん。で、どうなの、愛美」

「うわーん逃がして！」

「愛美だつて人の話だと超ノリノリでしょ！」

彼女達がエミさんを問い詰めている間に私のチーズケーキとカフェラテが運ばれてきた。店員が通りかかったからか、少女達は声のトーンを下げ、その間の話し声は食器の音などに阻まれて聞こえない。「ごゆっくりどうぞ」と微笑んだ店員に会釈して、カフェラテに口をつけた。ほんのりとした甘さと苦さの混ざり合った味は好みかもしれない。それでも、またこのカフェに来てみようかという気になる。

「ねえ、ところで注文決まつた？」

「チョコケーキかモンブランかで悩んでる……どうしよう。渚紗は？」

「わたしは抹茶タルトとミルクティーにしようかなつて」

「決めるの早いよね、渚紗。そんな感じで彼氏も決めちゃつたりして」

「比奈、今日そればかり。まあ……こんな感じでさつくり決めたいよね。彼氏も結婚もさ」

ナギサさんは呆れたような笑いを含んだ声で言うと、「メニュー、どうぞ」とさつくり自身の話題を閉じた。しかし不愉快そうな物言いでもなく、先程まで問い詰められていたエミさんもそうだけれど、ナギサさんも恋愛話が嫌いというわけではないどころかわりと好きらしい。まだ高校生くらいだというのに、もう結婚という言葉が出てくるのだから、最近の少女達は進んでいるのだろうか。私が高校生のとき、冗談でも結婚なんて言葉は出てこなかった。芸能人の結婚報道について盛り上がり、姉や年上の親戚などが結婚したとかしないとか、離婚したとか、そんな話をするのがあつたりしたくらいだ。結婚はもとより好きな人と暮らすということにも漠然とした憧れがあるだけで、そのくせ、将来

はこんな家に住みたいといった理想はあった。そんな時期が懐かしく、思い出しているうちに、彼女達が偶然におませなグループなのかもしれないと思に至る。いずれにしても可愛らしくて、少しだけ頬が緩みそうになった。

「決めた、あたしチョコケーキとレモンティーね。愛美も鈴子もちゃっちゃと決めちゃいなよ」

「あ、それならわたしモンブランにしようかな。飲み物はココアでもちろん冷たいやつね」

「ごめん、わたし決まらないから、もうちょっとだけ待って。ほんとごめん……」

それまで発言しなかったスズコさんが気になって、読むともなしに読んでいた雑誌から少しだけ目線を上げてみる。やはり少しおませなグループにいるだけのことはあって、他の少女達と同じように薄らとお化粧をした、今時の少女だ。ただ、繰り返し謝罪をしているせいで控えめな印象を受けてしまった。ヒナさんはけらと笑って「謝りすぎ」と言いながらスマホを取り出す。彼女がリーダーなのだろうか、エミさんも釣られるように笑ってスマホを弄りだした。ナギサさんはスズコさんになにか話しかけている。うまい具合にバランスの取れているような四人組で、人間、収まる場所に収まるものだろうと感心してしまっ

た。彼女達を見ると、自分の学生時代を思い出して仕方がない。私が高校生の頃、確かに休日も遊ぶような友達には恵まれていたけれど、こうして行動が揃ったりとか趣味が似通ったりとか、そんな友達はあまりいなかった。私は昔からインドアで不真面目だったけれど、友達にはスポーツ少女や勤勉な優等生が多く、なかなか気まずい思いをしたものだ。全員が共通して見ているドラマの話や恋愛話に花を咲かせている彼女達からすれば、おそらく想像もできないほど話が合わなかった。それは友達なの？ くらい言われてしまうかもしれない。事実、こうした話をすると、何人かは冗談半分とはいえそうした疑問を投げかけてきた。私はそのたびに、友達だからといって趣味や好きなもの、嫌いなものが被るわけではないと言いつ張ってきたけれど、彼女達のような、趣味などが似

通った者で集まっているらしいグループを見るたびに肩身が狭くなる思いをしている。羨ましいような、どこか、恐ろしいような。

「鈴子、注文決まったって。店員さん呼んでいい？」

「呼んじゃおっか。ここってベル……は、ないか。そうだよ。お洒落なカフェってベルとかないよね。すみませーん！」

お洒落なカフェにはベルがないと言いきったヒナさんがなんだかおかしなくて、一瞬だけ、どうしてこれほどまっすぐに子供らしい少女達の関係を恐ろしいと思ったのか分からなくなるほどだ。ただそれも一瞬で、すぐに思い直す。私が恐ろしいと思ったのは、あまりにも趣味が似通い、好きなものも酷似しているからだ。若者に苦言を呈していた出演者のいたテレビ番組は、あのとき、最近の若い女の子達はだいたい同じような格好をしているとも言っていた。そうした様子を少し茶化して量産型女子などと名付ける様子は滑稽で、聞いたそのときは笑ったが、翌日、同じような装いの少女達がずらりと並んでいる光景を実際に目撃したときには笑えなかった。奇妙な統一感が恐ろしいのだ。一時期だけやたらと注目されていた双子ファッションというものに似ているけれど、あれは示し合わせて意図的に行うものだ。しかし、この量産型女子というのは、流行りに合わせた結果などを経て意図せず似通った装いで街を歩き、しかし彼女達はそのことに気づいていないというものだろう。当人達が気にしていないのであれば、特に害を及ぼすわけでもない彼女達を外野が気にする必要などないということも分かっていても、不気味さと少しの嫌悪感を誤魔化すことはできなかった。流行りがあっても、そこに乗る必要があるのだろうか。個性というものをどう考えているのだろうかと思ってしまうのは、私が歳を取ったからなのだろうか。今の私が高校生だったのなら、やはり流行りに乗って友達に合わせてそれが当たり前のように振る舞っていたのだろうか。まったく想像がつかない。おそらく彼女達が、趣味嗜好の合わない者も友達と呼ぶことを想像できないように。

メニューを指差しながら注文を済ませた彼女達は、スマホをテーブルの上に置いたまま談笑に戻った。スマホケースも似ているのだろうかとか気になりましたが、さすがにまじまじと見ることは憚られたので、氷が

溶けて少しだけ水っぽくなったカフエラテを口に含む。話題はやはりエミさんの恋愛話が続いているようだ。スズコさんの声は聞こえない。エミさんは「やだ、もう」とか「だーかーらー、ね?」とか、うましくはぐらかせないままどうにか話題を終わらせようとしている。その表情は笑顔のままだった。

## 一章 中原愛美の場合

愛するに美しいと書いてエミ。よくメグミって読まれたりして、そのたびエミとメグミはどちらが可愛いんだろうと考えたりもするけれど、わたしの名前はエミなので考えてもあんまり意味はないのかもしれない。それに、エミという名前はとても気に入っていた。強いていうのなら、画数が多いと気が強いと思われがちだから、絵に美しいのエミの方が好きだな、くらいの不満しかない。

「いいなあ、比奈は。背が高いから、なんだって似合うよね」

今日は、月曜から約束していた比奈とのショッピングの日だった。普段は行かないデパートまで行つて、開店時間からずっと二人ではしゃいでいる。

比奈と服を見に行くと絶対、いいなあと羨んでしまっていた。比奈は背が高く綺麗で大人っぽい。外見だけじゃなくて、誰に対してもいっただって自分の意見をはっきりと言えるところなんてほとんど大人と同じじゃないかな。物怖じしない性格で、だからクラスを中心にいる。比奈はわたしの憧れだったし、みんなだって比奈に憧れていると思う。たとえば鈴子だってそうだろうし、もしかしたら渚紗だってそうかもしれない。鈴子は控えめであまり喋らないし、渚紗もあまり自己主張しない。まあ、鈴子は自己主張できないけれど渚紗はしただけっていう違いはあるし、それに、渚紗は冷静っぽく見えて気が強いのでちよつと苦手だったりする。細かいことを気にする神経質なところもあるから、比奈とは仲がいいとも思えない。どうしてこの二人が、わたしや比奈と一緒にいるんだろう。わたしが学校を休んだ次の日、気づけば彼女達が加わって

いたから、わたしはその経緯をよく知らない。よく知らないままだけれど、比奈が友達と思っているのなら、わたしにとっても友達ということにしていた。

「そうでもないよ。愛美と違って可愛い服が似合わないしさ。あたしってスカートだって微妙じゃない? だから制服とか、ちよつと嫌なんだよね」

言いながら、比奈はとても満足そうだった。比奈はあまりスカートを選ばないし、可愛い服だつてきつと好みじゃない。今日も全体としてカジュアルに纏めているし、バッグも飾りがなくてシンプルだから、そんな彼女の隣にいるわたしは、周囲からどんなふうに見えているんだろう。なんとなく居心地が悪いし、比奈はそんなわたしを羨ましいとか思わないだろうけれど、その逆、馬鹿馬鹿しいとは思っているかもしれない。「でもわたし、雑誌で見たのそれっぽくパクつただけみたいなどころあるから、比奈ってすごいと思うんだけどな」

こうしておどけて言っておかないと、笑われるかもしれないと思った。この前カフェに行ったとき、渚紗にシユシユを指摘されて、嬉しいと思いがたも、冷たい手で心臓をぎゅつと鷲掴みにされたような感覚もした。あんたはやっぱ雑誌の真似しかできないんだ、とか言われたような気がして。そういえば渚紗も流行りとかを追っている感じはしないから、そういうところは比奈と気が合うのかも。そこに気づいたとき、比奈が大雑把で渚紗が神経質で良かったと思つてしまった。もしそのあたりまで気が合ったら、比奈はわたしじゃなく、渚紗と一番に親しくなつたかもしれないから。

「今日って、渚紗と鈴子は誘わなかったの? みんなで服選ぶの、絶対楽しいと思うんだけどなあ」

「鈴子は塾があるらしいよ。で、鈴子が来ないんだつたら渚紗は来ないだろうなって思つて誘わなかった。あのふたりつてべつたりじゃん」

比奈はげらげらと笑った。意地悪そうだなと思つたけど、比奈に悪意はないんだろうな。比奈はなにも考えていないわりに直球な言い方をしたり、相手が言われたくないようなことまで言つたりするから、わたしはたまに疲れてしまう。でも一番に仲がいい比奈のことなので我慢

できる。これが比奈じゃなかったら、こんなふうに接することもできないだろうとは気づいていた。親友の比奈だから許せるのであって、たとえば渚紗に意地悪な言い方をされたら、そこだけは許せなくなる。そういうええ前に美香ちゃんと……。

「ていうかさ、鈴子が渚紗にべったり、って感じしない？」

思い出したくないことを思い出してしまいそうになったから、慌てて、逃げるように口を開いた。このフロアもすっかり見飽きてしまった。そういえばお昼ご飯がまだだったことに気づいたので、なにか食べようと二人で決めて歩いているうちに、話題は渚紗と鈴子の関係になってしまった。もうちょっとお洒落の話もしていたかったけれど、比奈が「べったりじゃん」って言うのだからその話題に乗りなればいけない。わたしが言うと、比奈は手を叩いて笑った。すれ違ったデート中のカップルっぽい人達がちらりと振り向いたことに、比奈は気づいていない。

「分かる分かる！ 鈴子、他に友達いないんだよ。あーでも、渚紗も、あたしら以外にいない？ 性格きついし」

「神経質なところない？ わたしとか、たまにすごい睨まれてない？」

「睨んでる。間違いない」

比奈はとても面白そうだった。他人事だと思つて……と思つたけれど、確かに他人事だ。わたしが渚紗に睨まれても、嫌われても、比奈には関係ないことだった。わたしは比奈が嫌われたり、誰かに睨まれたりしたらすごく気にするのに。比奈はわたしのこと、どう思っているんだろう。一方的な友情というわけでもないのに、なんだか歪んでいる気がした。

パスタのお店に入ると、比奈はてきぱきとメニューを開き、「あたし、これね」と指差した。そしてテーブルの隅に置いてあったデザートメニューを手にとると、じっくり考え込むように無言になる。その沈黙が怖くて、わたしは「美味しそうだね」と適当なことを言った。あんまりパスタは好きじゃないから、比奈の選んだカルボナーラも美味しそうに見えない。

「でしょ。今日はカルボナーラの気分なんだよね。愛美も早く決めちゃいなよ」

比奈はいつも気分で決めているけれど、たまに、食べるときになつて

「やつぱり違う気分」と言い出すこともある。わたしはいつもそれが少しだけ不愉快なのに、比奈とご飯を食べるのは好きだった。矛盾している。きっと渚紗がわたしを睨むのは、そんな矛盾を昇華しきれないことを見抜いているからだ。だからどちらかと言えば渚紗が正しくて、それを嫌うのは間違っている。

「渚紗の話だけじゃ」

デザートを選びながら、比奈は渚紗の話が続けた。先に話題に出したのはわたしだけれど、なんだか陰口を楽しんでいるみたいで気分が悪い。わたしは渚紗が苦手だけれど、別に嫌っているわけではなかった。

「あ、そういうええ愛美には話してなかったよね。なんで渚紗がうちのグループにいるのかって話」

「うん、聞いたことない。わたしが休んでるうちに仲良くなったよね。あれって、なんか理由あったの？」

それはずつと気になっていたし、悪口ではなさそうな話題で安心した。少し身を乗り出すと、比奈は、満足そうな顔をして話し出す。

「あいつは友達いないって言うか……前まで相原あたりと一緒にいたんだよ。でも渚紗って上から目線みたいところあるじゃん？ そのへんで喧嘩して、あたしが仲裁してあげた感じ」

「美香ちゃん？ 美香ちゃんと一緒だったんだ……うわあ……」

身を乗り出してまで気になったことなのに、もう興味をなくしてしまった。美香ちゃんはかなり気が強いし、自分が中心にいないとすぐ機嫌を損ねる。そんなことは幼馴染みのわたしじゃなくても、クラス誰もが、もしかすると学年の大半の人がなんとなく知っていることだった。それなのに渚紗は空気を読まずに意見して、それで喧嘩してはみ出たらしい。それならどっちもどっちだ。美香ちゃんも悪いし、渚紗も悪い。そこからはもう、適当な相槌になってメニューに興味と視線を移したけれど、比奈は別に機嫌を悪くしなかった。さつさと注文を決めるって言ったのは比奈だし、比奈は美香ちゃんにちょっと似ていた。二人とも、誰かに話を聞いてほしいというよりは自分が喋っていたいだけだ。

「鈴子も相原といたんだけど、渚紗についてきたんだよ。愛美の言うように渚紗にべったり。あの二人って中学のときから一緒なんだっけ？」

「らしいよ。前に渚紗がそんなこと言ってた」

「なんかさあ、ああいうのってちょっと気持ち悪いよね」

ちらりと視線を上げると、比奈はしらけた顔をして手鏡を取り出して、わたしの返事なんて聞くつもりがないみたいに、少し乱れた髪を整えている。わたしがすぐに答えられなかったのは、渚紗と鈴子がつつと二人でいることが気持ち悪いなら、わたしと比奈、それに美香ちゃんはどうなんだろうと思っただけだった。わたしも、学校にいるときはだいたい比奈と一緒にいる。それどころかこうして日曜だって一緒に過ごすことも多い。美香ちゃんだって一人でいるときなんてほとんどない。それは気持ち悪くないだろうか。

「うーん……あ、そうかも」

思ったことを言えたら良かったのにと思ったのは、気まずくなりながら頷いたあとだ。比奈の満足そうな顔を見たら少しだけ悔しくて、「注文決まったよ」とかいう、あからさまに話題を逸らすようなことだけ口にした。

「デザートはわたし、バナライイスにしようかな」

「愛美ってさ、デザートだけは決めるの早いよね」

わたしが決めたあと、比奈はまだ少し悩んでいるみたいだったけれど、もういいやと呟いて呼び出しボタンを押した。ぴんぽん。少し鈍い響きのあと、店員さんが来るまで、比奈はクラスの子の噂話ばかりだった。

「相原で思い出したけど、あの子、彼氏いるんだって」

「え、ほんと？ まじで？」

「知らないけどさ、まじじゃない？ でも塩田じゃないっぽいから安心していいよ」

「だからわたしと塩田君、そんなじゃないって……」

比奈はまだわたしと塩田君の関係を疑っていた。あの日はただ本当に、日直の仕事をしていただけなのに。もしかして比奈が塩田君のことが好きなのかな、とは思ったけれど、わたしがそれを訊くことはなかった。

「ご注文お伺いいたします」

「カルボナーラ単品とナポリタン単品、食後にティラミスとバナライ

スお願いします」

店員さんは復唱して確認したあと、メニューを持って奥に戻った。食事中も、デザートに移っても、比奈の話題は主に恋愛関係の噂話だった。

今日はなんだか、とても疲れる一日になってしまった。比奈のことは嫌いじゃないし、比奈とのショッピングが一番好きだけれど、それでも疲れてしまうのは誰かの悪口が多いからだ。美香ちゃんの悪口くらいならわたしもあんまり気にしないけれど、渚紗や鈴子は、いつも一緒にいるから少し気分が悪くなる。気持ち悪いとか言うくらいなら、グループに入れなければ良かったのに。渚紗と比奈はわりと気が合うけれど、鈴子が絡むと、比奈は渚紗のことも悪く言う。ただ、その場で悪口を止められないわたしが後からうじうじ悩むのも卑怯だ。美香ちゃんと最後に喧嘩したのも、こうしたことが理由だった。物事をなんでもはっきりさせたがる美香ちゃんは、その場では流すくせに時間が経つてそのときの不満を言うわたしを自分勝手だと非難した。あのときは美香ちゃんばかりが悪いと思っていたけれど、今になってようやくわたしも悪かったんだと気づいてしまった。そして気づいてもどうにもできないから、こうしてうじうじ悩んでしまう。せめて同じ間違いを繰り返さないようにしようと思うのは簡単で、結局、美香ちゃんと同じようなタイプの比奈に同じような態度を取るんだから、わたしは本当にだめだ。それなのに、誰かに相談したいとは思わなかった。わたしは自分の性格を変えたいわけではなくて、誰かとぶつからずに過ごしたいだけなんだと自覚している。それに、わたしはもう自分がどうすればいいのかわかっていた。自分の意見を言わずにいることだ。自分が本当に好きなものとかを言わずにいれば、誰とも衝突しない。流行りものを追いかけていけば「ミーハーだね」と言われるくらいで済むし、買った服がちょっと似合わなくても「流行ってるから着てみただけ」という言い訳ができる。好きなテレビ番組や雑誌の話より、みんなが見ているようなものの方が受け入れられる。本当に好きなものを否定されればショックだけれど、適当に合わせる好きだと言っているものを否定されても、わたしはなんとも思わない。えー、ひどーいという言葉は、別に思っなくてもすんなり口を

衝いた。

「……やってらんない」

それでもこうしてときどき、どうしようもないことをしていると思っ  
て後悔してしまうから、わたしは友達付き合いかに向いていないんだ  
と思う。比奈も美香ちゃんも渚紗も鈴子も、こんなに無理して誰かと一  
緒にいるようには見えないから、わたしはやっぱりどうしようもないんだ  
と気づいてちよつと泣きそうになってしまった。

今日はあるなに、楽しかったのに。

## 二章 岬渚紗の場合

よく、損な役回りだと言われる。それなりに自分の都合のいいように  
振舞っている自覚もあるから言われるたびに否定しているけれど、そう  
思っているときはあるので分かってもらえて安心していた。それでもこ  
の役回りに甘んじているのは、そういう付き合い方しかできないからだ。  
自分でも疲れる立ち位置ではあるものの、誰かに頼るといのは居心地  
が悪い。それに比べると、たまに言われる「ありがとう」という、決し  
て心からのものというわけでもない、数分後には言った本人も忘れてい  
るかもしれない言葉の方が安心した。

「おはよう、渚紗」

「早いね」

「寝坊したかもって思ってたら、逆に間に合っちゃって」

鈴子と親しくしているのも、満足感が得られやすいからなのかもしれ  
ない。彼女とは小学生のときからの付き合いだ。いつもなんとなく困っ  
たような顔をしている彼女はなにかと目についたし、学級委員をしてい  
たわたしは、先生から彼女のことを任せられることも多かった。ただ、先  
生達が気にするほど、彼女はクラスで浮いていたわけではなかった。好  
きな本の話題で盛り上がったっている姿を見たこともあるし、彼女は落ちこ  
ぼれのように扱われながら、勉強も運動も他のクラスメイトより抜きん  
出ていた。わたしはいつも彼女に抜かされないように必死だった。わた

しが彼女より優秀でなければ、彼女はわたしを頼ってはくれないと思っ  
ていたから。些細なことでも「ありがとう」と言ってくれる彼女は、わ  
たしのなにかを満たしてくれていたのだ。それからずっと距離感や関係  
性は変わらなくて、高校生になった今も変わらず、鈴子はわたしを頼っ  
てわたしはそれを喜んでる。

「愛美、風邪ひいたからお休みだつて。そういうえば、金曜も顔色悪そうじゃ  
なかった？」

「そうかも。早く良くなればいいね」

「ね。そろそろ風邪の時期なのかな……」

愛美のことだから、土日になにか嫌なことでもあったに違いない。愛  
美はつらいことがあると、すぐにお腹を痛くする。その確信のせいで、  
心配そうな鈴子を横に、わたしはすっかり別のことを考えてしまってい  
た。愛美が休みなら、今日は比奈と一緒にいなくていい。いつもは比奈、  
愛美、鈴子、わたしの四人で行動している。だけど愛美が休むと、わた  
しと鈴子はお弁当を食べるときくらいしか比奈と一緒にいることもな  
い。そういう意味では、グループを纏めているのは愛美なのかもしれな  
い。わたしや鈴子がグループから少しでも離れようとする、愛美はす  
ぐ気づいてそれを引き留める。愛美にとって比奈以外の友達なんてどう  
でもいいだろうには思うけれど、愛美は、グループの誰かが欠けるこ  
とに強い抵抗があるらしい。みんなで仲良く、みんな一緒にというタイ  
プ。愛美と話す前から、彼女がそういう性格だということは知っていた。  
美香は彼女のそういうところをしょっちゅう愚痴っていたのだ。ただ、  
美香も、愛美のそういう頼りないところに助けられたことはあるのだと  
思う。美香が気づかなかつただけで。わたしが鈴子に助けられているの  
と同じように。

「渚紗も気をつけてね」

「鈴子もね」

机の端の、可愛らしいブックカバーをかけた本に目が移る。「それ、  
可愛いね」と言うと、鈴子は恥ずかしそうに言いきりだ。

「これ……中学生のときに買ったやつなんだ。子供っぽいかと思つたん  
だけど、前に使ってたブックカバー、しおりのとこがだめになっちゃっ

て、これしかなくて」

言われてみると、鈴子の最近の趣味ではなく、中学生のときの趣味に近い。今の彼女はシンプルなデザインを選ぶことが多いけれど、ちょっと前はデフォルメされた兎や猫が描かれたものを選んでた。高校に入ったらばかりの頃も使っていたと思うけれど、比奈に子供っぽいと笑われてから少しずつやめていたので、久しぶりに見てなんだか嬉しい。

「わたしはそれ、いいと思うよ」

「そう？良かった」

鈴子は安心したように笑って、本をそっと鞆の中に入れた。時計を見るともうすぐ朝のホームルームだ。絡んでこなかったから気づかなかつたけれど、いつの間にか比奈も教室にきていた。比奈のすぐ前の席に座る美香をじつと睨んでいる。

ホームルームを終えると、隣のクラスの新村が手招きするのが見えた。廊下に出て「なに？」といって声をかけると、彼女は両手を顔の前で合わせて頭を下げる。

「ごめん、世界史の資料集持ってない？二時間目が世界史なんだけど、資料集使うって言われていたのに、忘れちゃって……」

「いいよ。今日は世界史ないから、放課後にでも返してくれたらいいし」「ありがと！あと愛美いる？あいつに地理のノート貸してただけど」「分かった、ちょっと待って」

教室に戻って、後ろのロッカーから資料集を取ると、ついでに愛美のロッカーを覗く。人のロッカーを許可もなく漁るのはどうかと思うけれど、愛美も同じことをするから別にいいだろう。ファンシーなデザインのノートに紛れた、シンプルなノートを見つけると、教室のドアから離れて廊下の窓辺にもたれている新村に渡す。

「はい、これ資料集ね。ついでに愛美に貸したっていう地理のノート」

「助かった！」

ばいばいと手を振った新村に手を振り返して教室に戻ると、鈴子が、「ちょっと意外だった」と微笑んだ。

「なにが？」

「渚紗が愛美のロッカーいじったの。渚紗、そういうの嫌いかなって思っ

てたから」

「好きじゃないよ。でも愛美もやるんだし、やられたって平気なんですよ」渚紗らしいねと鈴子は呟いた。鈴子の口癖かと思うほど、耳慣れた言葉だ。わたしと鈴子は考え方や価値観がまったく違う。そのたびに鈴子は、わたしや鈴子自身を否定するのではなく、わたしらしいと呟いている。

「でも愛美って、たぶん、それされるの嫌だと思うよ」

鈴子は困ったように笑って、一時間目の現代文の準備を始めた。「今日は辞書使っらしいけど、渚紗、ちゃんと持ってる？」と訊ねられ、電子辞書があるからと答えると、鈴子は困ったような笑顔を曖昧な笑顔に切り替えた。鈴子のはきはきとした笑顔を最後に見たのはいつだっただろうか。彼女はなんでもこなせる優等生タイプだけど、自分の意見をはっきり伝えることはできなかった。貸したものを返してほしくても返してと言えない、されて嫌なことがあっても嫌と言えない。小学生や中学生のときは、鈴子がなにを言いたいのか察することができたわたしも、高校生になってからはそれが難しくなってしまった。わたしが変わったのか、鈴子が変わったのか、それは分からない。そのことを鈴子はなんとも思っていないだろうけれど、わたしは焦燥感を感じていた。鈴子に頼られていたいわたしにとって、鈴子の気持ちを察せないということは大きな弱点なのだ。もしかすると美香は、愛美のことを愚痴りながらも愛美にずっと頼られる唯一でいたかったのかもしれない。席に戻ると、美香が取り巻きの女の子達に新しいスマホカバーを褒められて得意気にしているのが見えた。会話はよく聞こえないけれど、わざとらしく顔を逸らした美香と目が合う。彼女らしくもなく小さく笑って、彼女は手を振った。

「わたし委員会があるんだ、ごめんね」

お昼休みになってお弁当を食べようとすると、ノートを抱えた鈴子が申し訳なさそうに言ってきた。ペンはどうしたのと訊くわたしに、ポケットを小さく叩く。

「気にしないで、委員会お疲れ様」

「ほんとにごめんね、放課後はないから一緒に帰ろうね」

小走りて教室を出た鈴子を見送ると、今度は美香がわたしの席の前に立った。わたしと美香が最後にゆつくり話したのは喧嘩のような言い争いをしたときなので、ちよつと気まずい。

「あのさ、お昼一緒に食べない？」

取り巻きの女の子達はどうかと思っただけれど、そういうえば文化祭が近い。それぞれ部活の出し物を相談するためにお昼休みを使っているのかもしれない。断る理由もなかったので頷くと、彼女はわたしの前の席に座った。最近、比奈や愛美からよく聞く塩田君の席だ。

「今日って愛美はどうしたの？」

「風邪だって。……あ、明日、ノート見せてあげないと」

「渚紗がノート貸すの？有馬じゃなくて？」

「いつの間にかそうなって」

そういうえば、愛美は比奈の友達であってわたしの友達だったわけではないのに、ノートを貸したりプリントを見せてあげたりするのはいつだってわたしたちだ。愛美はちよつと面倒なところもあるけれど、ありがたうと言ってくれるので気にしてなかった。美香は溜め息とも相槌とも取れる息を吐いて、ステイックパンをかじった。

「……渚紗の悪い癖じゃない？そういうのって。あんま愛美を甘やかさなくてもいいと思うけど」

吐き捨てるような、刺々しい言い方だった。

「そうかもね。まあ、あとで泣きつかれるよりは先に渡した方が楽っただけだから」

美香は愛美にノートを貸したこともあるのだろうか、それでなにか後悔しているのだろうか。愛美とはまだ親しいと言い切れないからそのあたりの事情はうまく察せないけれど、愛美は、親しくなればなるほど扱いが雑になるところがある。美香の「甘やかさなくてもいい」という言葉の意図は掴めないけれど、とりあえず覚えておくことにしよう。この話題を打ち切りたいという気持ちは伝わったらしい、美香は別の話題を振ってきた。

「さっき出た数学の宿題、難しくない？」

「習ったばっかりのところだからそう思うだけだよ。美香って数学得意じゃん」

「たまたま向いてるだけだって。でもありがと」

美香ははにかんで笑った。久しぶりに話すせいでお互いに手探り状態だけど、彼女の、人の空気を敏感に察するところは変わっていないと安心した。比奈や愛美がときどき言うように、美香は自分が中心でない気が済まないわがままな性格だし、言葉も刺々しいことが多いけれど、わたしは結構好きだった。誰かに頼ると疲れるわたしが、初めて対等でいられた友達だと思う。今でも友達かどうか、それは分からないけれど。わたし達が食べ終わっても塩田君は戻ってこないで、美香は変わらず塩田君の席を占拠していた。

「そういうえば美香って彼氏とかいるの？」

「は？なにそれ」

美香は思いきり顔をしかめると、「誰に聞いたか知らないけどさあ……」という不機嫌な声で続けた。

「いないよ、そんなの。彼氏とかいらなくない？休日潰れそうじゃん」  
この答えはちよつと予想外だった。美香は買い物が好きだと言っていたし、理想のデートをあれこれと話している姿を見たこともある。そうした感想をどう言おうか迷っているわたしに気づいた美香が、「なに？」と拗ねたように促した。

「意外だなんて……遊びに行くのとか好きでしょ、美香」

促されたからには素直に答えるしかない。諦めて笑うと、美香は納得してくれたいらしい。比奈だとかうはいかない。比奈は見掛けよりずっと自分に自信がないのか、必要以上に探るときがある。比べるのも悪いとは思いつつ、わたしは比奈と美香なら美香の方が話していて楽しかった。「好きだけど、男とは趣味が合わないと思うし疲れそうじゃん」  
「そういうものかな」

「いや知らないけど……そういうのは大学生になってからとかでも全然いいと思うんだよね。今は女友達と一緒に絶対楽しいし」

美香はけげなく笑った。こういう笑い方は珍しくて、わたしも釣られて声を出して笑ってしまった。取り巻きと一緒にいる美香は、ちよつ

と高飛車で澄ました笑い方をすれば、わたしと二人でいる彼女はこうして心から楽しそうに笑う。わたしはそれを知っているから、みんなのように美香を嫌いになれなかった。

「だから、有馬にもそう言つていて。どうせ有馬でしょ、そういうこと言うのって」

「別に比奈に聞いたわけじゃないけど……仲悪いよね、比奈と美香って」「あっちが突っ掛かってくるだけだし。てか、誘つてあれだけ、あたしとご飯食べて良かったの？ 神崎さんは委員会だけで有馬はいたじゃん」

「気にしないでいいよ」

美香とは今、微妙な距離のある関係だ。そうなった原因は比奈だけど、わたしにも問題があったし美香にも問題があったのだと思うから、別にそのことで比奈を恨んではない。美香もそれを分かっているから、こうして今更とはいえ気を遣つてくれている。美香は派手でわがままなくせに変なところが律儀だ。

「それならいいけど。……またご飯とか誘つてもいい？」

「いいよ、今度遊ぼうか。休日潰れちゃうけど」

「なにそれ」

美香はとうとう、手を叩いて笑った。よく笑う美香と話すのは楽しい。わたしが一方的に話すわけでもないし、一方的に聞いているわけでもない。比奈、愛美、鈴子、その誰とも築けない関係が、美香とは自然に築けていた。だからといって比奈達を嫌いでいるわけでもないから、わたしは本当に都合のいい人間だと少し呆れている。

### 三章 有馬比奈の場合

月曜日のお昼にラインを送ったのに、ずっと既読がつかない。そのまま火曜日を迎えると、心配よりも苛立ちの方が先にきた。どうせ愛美のことだから、体育が嫌で休んで、そのままずっと休んでるんだと思う。それに本当に体調が悪くても、スマホくらい見るでしょ？ そんな

なことをママに愚痴っても、ママは苦笑いして「友達なんだから待つてあげなさい」って当たり前のことしか言ってくれなかった。

「でもさあ、まじで風邪だと思っ？」

「そう言ってるんだつたらそうなんじゃない？」

あたしと同じで、風邪とか思ってもなさそうなのに適当な態度の渚紗にも腹が立つ。もしかしたら愛美が休んでいる本当の理由を知っているのかもしれないという、ありえないようでありえるような予感がして思わずお弁当箱を机に叩きつけた。鈴子はあたしの苛立ちにも、苛立つあたしに向けた渚紗の鬱陶しそうな視線にも気づいていない素振りでお焼

きを食べている。

「そういうの、ムカつくんだけど」

「じゃあお見舞いにも行つたら？ 比奈は家知ってるんでしょ」

「知ってるけどさ……だから、そういう問題でもなくない？」

あたしは愛美から話してほしいのであって、事情を訊きに行きたいわけではない。察しの悪い渚紗はいつも、冷静のようで頓珍漢なことばかりだ。ママも渚紗も、まるで自分の意見が正しいように言うけれど、実際正しかったとしてもあたしの苛立ちとかが収まるわけでもない。あたしは正しいことが聞きたいのではなくて、あたしの気持ちを分かってくほしいだけなのに。やっぱり友達としては愛美が一番だ。愛美はあたし

のことをよく分かっているし、あたしを否定したりしなかった。「あと、わたしも鈴子も、愛美からなにか聞いてるわけじゃないよ」だから、そうじゃなくて。

確かにそれを疑ったけれど、本当に気になるのは、渚紗が愛美の事情を知っているかどうかではない。それはあんまり大事なことでない。あたしが除け者にされているのではないか、っていうことが気になるだけで……。ムカついてお弁当箱を叩きつけたのは反省しているけれど、やっぱり察しの悪い渚紗に腹が立って唇を尖らせた。食べ終わった鈴子が、「でも、愛美って風邪とか長引く方だし……」とか言つて困つたように首を傾げる。

「だから、本当に風邪なのかどうか怪しいって話じゃん」

まったく伝わっていない。もう苛立つことにも疲れて、イチゴオレの

バックを開けた。愛美のいないお昼休みは退屈だ。愛美がいなければ、渚紗と鈴子はあたしと一緒にいることも少ない。しかも昨日は、委員会だった鈴子はともかく、渚紗は相原なんかとお弁当を食べる始末。なんでそんなことするかと思っただけで、さすがに言っても無駄だと気づいているから不快感を諦めた。ていうか、さっき買ったばかりでまだ冷たいイチゴオレを飲んでるうちに頭も冷えてきた。そしたらなんとなく居心地が悪くなって、お弁当箱を片付けている鈴子をちらりと見る。彼女の、たまに見る無表情からはなにも読み取れない。渚紗はちよつと見ただけで分かる、あたしに呆れていた。その上から目線みたいな態度は腹立つけれど、先に機嫌を損ねたのも八つ当たりしたのもあたしだから、仕方なく口を開いた。

「もういいよ。なんかごめん、ちよつとキレてた」

「わたしもごめん。でも本当に愛美が気になるなら、お見舞い行ってあげたら？ ラインも既読つかないし、心配だね」

渚紗も何度か愛美にラインを送っているらしい。そつちも既読がつかないなら、あたしが気にする必要はなかったのかもしれない。さっきまでぴりぴりしていたのが馬鹿らしくなって、相槌を打つのも面倒になった。イチゴオレを啜って誤魔化すと、鈴子が苦笑するのが見えた。

愛美と初めて喋ったのは、中学二年生のとき。同じクラスだけど話したことはなかったのが、体育でペアを組んだのがきっかけで、なんとなく話すようになってなんとなくつるむようになった。確かあれは身長順番で並んでいたはずだけれど、今では五センチくらいあたしの方が高い。愛美はミーハーだしわりと不真面目だけれど、あたしも真面目ってわけでもないしむしろ委員長系は苦手だからちよつどいい関係だった。愛美はそのときから、授業中に寝ても忘れ物が多くても先生からは笑って許されてしまうような愛嬌のある子で、反対にあたしはがつつり怒られることが多かった。不公平だと思っただけで、それは今でも変わらないけれど、愛美のように笑っていじられるよりは怒られた方がましだと思えるようになったから、愛美との付き合いが続いている。こういう周囲からの不公平さに苛立つようになったら、もう友達とかやっていけない。

あたしは渚紗のずれた真面目さや鈴子のはつきりしないところに苛立ちをさせるけれど、周りからのあたし達への不公平に苛立つことはなかった。五時間目の世界史はとんでもなく眠い。ペン回しにも飽きてしまった、前の席に座る相原を睨む。こいつ絶対に髪染めている。なんでこんな奴が生活委員なんだろう、爪だって透明だけドラメの入ったマニキュアなんか塗っているし。さすがに化粧は月曜の体育のとき怒られてから、今週はしないつもりでいるらしい。ざまあみろ。

「先週のプリントの答え合わせするぞー」

先生のやる気なさそうな声に、やっぱり先生も眠いのかと笑ってしまった。あたしは先週のプリントどころかその前のプリントもクリアファイルに入れておいたけれど、何人かは忘れてきたらしい。愛美がいたら、愛美も忘れていたに違いない。

「せんせー、あたしも忘れましした」

相原が立ち上がってプリントを取りに行く。こういうとき、微妙に優越感を感じてしまう。忘れ物をしたからって劣っているわけではない、していないから優秀ってわけでもないっていうのは分かるけれど、相原が忘れてあたしが忘れていないとやけてしまうのだ。さすがにこれは性格が悪いと自覚している。でも相原も同じこと思っているに違いないと決めつけて、こつそり張り合っていた。相原も張り合っているはずだ。あたしばかり意識しているとか絶対に嫌だし。

「しつかりしろよ、生活委員」

「はい」

愛美は忘れ物を許されるタイプだけれど、相原もそうだった。自己中ではがままで、いつも目をつりあげて拗ねたような顔しているくせに、先生には好かれている。成績ならあたしの方がいいし、鈴子のほうが真面目だし、先生にとつて都合がいいのは渚紗だし、愛嬌は愛美の方がある。それなのに、そのどれもいないような相原が先生に許されているのは謎すぎる。仮病の愛美のお見舞いついでにこのあたりも愚痴ろう。

そういえば中学のとき、愛美はあたしより相原と仲が良かった。そのときあたしも、愛美じゃなくて新村と仲が良かったけれど、愛美と相原が幼馴染みだということは彼女から聞いた。そのとき既に相原と険悪に

近かったあたしは、相原が愛美を従えているに違いないと思ひ込んでいたし、あんまり間違つてなかつたと思う。いつくらいかはもう忘れちゃつたけれど、愛美はいつの間にか相原と距離ができて、だから今でもあたしと仲がいいのかもしれない。相原と仲良しのままならあたしと仲良くできないし、反対に、あたしと仲良くなつて相原とも仲良しでなんていられない。多分それは、あたしと相原が似ているからだ。同属嫌悪つてやつ？ 認めたくないけれど。

赤ペンに持ち替えて、黒板に書かれた解答をプリントに写しているらしい相原の後姿をもう少し睨んでおく。ちよつとピンクの入つた茶髪は、悔しいけれど似合っていた。あたしには絶対に似合わない色だから悔しいのだ。

六時間目の数学は寝ているうちに終わってしまった。先生は何度かあたしを起こしたらしいけれど、起きる気配がないから諦めたらしい。「思いつき寝てたね」と渚紗に言われて、うるさいなど笑つた。「今日のノートいる？ 愛美のお見舞い行くんなら、このまま持つて行つてもいいし」

「まじで？ ありがと、それなら借りる」

あたし達四人の中で、一番ノートが綺麗なのは渚紗だった。筆跡が薄いからコピーには向かないけれど、一番見やすい。鈴子はメモが多いし、愛美は抜けがちだし、あたしは色ペンを使いすぎる。だからいつの間にか、愛美にノート貸すのもあたしじゃなくて渚紗になっていた。愛美じゃなくても、誰かが休んだら渚紗のノートを借りている。

「渚紗が休んだらあたしら話むね」

「大袈裟すぎない？」

「でも分かるよ。わたしも、渚紗のノート好きだし」

珍しく鈴子があたしに同意した。鈴子も渚紗のノートを借りたことがあるらしいけれど、借りたところを見たことなんてないから相原のグループにいたときの話かもしれない。それか、借りたんじゃなくてちょっとだけ見せてもらったのかも。鈴子の変なところで自分に自信がなさすぎる。板書が正しいのか確認させてもらったことくらいありそう。

「愛美、ラインの既読ついた？」

「鈴子はどうなの？」

「わたしは送つてないから……」

だろうかと、分かつていながら訊いたあたしはやっぱり性格が悪い。鈴子は渚紗とばかり仲がいいから、どうせ愛美のこともそんなに心配してないんでしょと決めつけていたけれど、本当にその通りだったみたいで鼻で笑いそうになった。愛美もあたし以外にひついたりしないけれど、鈴子も渚紗以外にそんなにひついたりないから、愛美と鈴子は少し似ている。優柔不断なところも含めて。

「まだつかない。そういういえば渚紗、ノートそのまま愛美に貸すかみだけ、ほんとに借りていい？」

「いいよ、気にしないで」

愛美も鈴子も分かりやすいのに、渚紗のことはまだよく分かつていない。だから、この「気にしないで」が本心なのかどうか分からないけれど、嘘だったとしても嘘を吐いた方が悪いんだからととにかくに言い訳してからノートを受け取つた。

「じゃあ、わたし帰るね」

「あーいよ。なんか愛美に伝言ある？」

「んー……お大事にって言つていて」

思つてもなさそうな声だった。やっぱり仮病だと思つていられるだろうかと苦笑して、鈴子を見る。

「鈴子は？」

「あ、じゃあ、文化祭楽しみだねって……」

鈴子も鈴子で、特に伝言はないらしい。まだ少し先の文化祭の話をするくらいには話題がなくて、でもそれをそのまま言うのも気まずいというような、なんともいえない距離を感じる。あたし達つて友達だよね？ たまに、そう言つてしまふようになる。そのたび堪えているけれど、今日も、それを堪えて違ふ言葉を吐き出した。

「分かつた、伝えとくね。ばいばーい」

仲良く教室を出る渚紗と鈴子に手を振る。今日はあたしが日直。やば、二人が帰るまでに数学なにやつたか訊けば良かった。でも見送つてしまったのはもう仕方ないから、適当に誰か捕まえよう。

「あ、ねえ」

ちよっと迷った結果、吹奏楽部の子を捕まえた。あたしが入部三ヶ月でやめた部活だけれど、何人かとはまだ仲良くできていて、捕まえたのはそのうちの一人だ。

「数学ってなにしたらつけ。寝てたんだよね」

「比奈ちゃん数学めっちゃ寝るよね、先生嫌い？」

彼女は手を叩いて笑った。とつくに帰った相原の席に座って、ノートを見せてくれる。

「ありがと、助かった！」

「あ、三時間目の現代文は走れメロスだよ。今日休みだったのは愛美ちゃん、三村さんもだね」

書き忘れまで教えてもらって、わりと恥ずかしい。そうか、三村さんも休んでいたのか。愛美にばかり気を取られて忘れていた。ていうか、気づかなかった。

「まじでありがと、今度ジュースあげる」

「炭酸でよろしくね。じゃあ、ばいばい」

小さく手を振ってくれた彼女に手を振り返して、日誌を閉じる。教卓に置くと、まだ残っていたらしい担任が目元で笑った。

「寝すぎちゃだめだよ、有馬さん」

「うーっす」

「あと、中原さんのところに行くんだったら、プリント持って行ってくる？」

二日休むとプリントもわりと溜まってしまわらしい。あんまり休んだことがないから知らなかった。束を受け取ってクリアファイルに片付けると、担任は「有馬さんは頼りになるね」と笑った。

先生にこうして褒められることはほとんどない。愛美も、渚紗も、鈴子もよく褒められているから、気まづくなるのが嫌でそれを言ったことはなかった。だけどこうして褒められたりするときもあるから、あたしは、よく褒められる彼女達と友達でいられるんだと思う。

#### 四章 神崎鈴子の場合

今日も疲れた。

布団にもぐって溜め息をこぼす。スマホの電源は切っているから、愛美のミーハーも比奈の苛立ちも渚紗のその場しのぎもわたしには届かない。枕元に置いてある目覚まし時計で時間を確認すると、日付が変わる少し前だった。こんな時間なのによくやるなあと、呆れるというよりは逆に感心してしまう。愛美や比奈に遅刻が多いのは、だいたい日付が変わるくらいかわわって少し過ぎるくらいまでラインなんかしているからだと思う。条件が同じなのに遅刻しない渚紗はすごい。というより、渚紗がなにを考えているかは分からないけれど、付き合おうと思うだけ本当にすごい。わたしはもう、学校での付き合いだけで疲れてしまうのに。だけど渚紗を羨ましいとは思わなかった。

いつものグループで一番に渚紗のことを知っているのは、間違いなくわたしだった。小学校の頃から一緒だからというだけではなく、渚紗がわたしのことを見てきてくれたように、わたしも渚紗のことをよく見てきたからだ。渚紗はなんでもできた。勉強も運動もできたし、先生からの評判も良くて、参観日や行事のたびにどこかの保護者達からの評判も良かった。地域の人も「渚紗ちゃんは偉いね」といつも褒めていたし、お母さんも「渚紗ちゃんを見習いなさい」というようなことをよく言った。勉強とか、努力でどうにかなる方向ではない、違う方向で頭のいい子だった。要領がいいとか、そっちだ。だから渚紗は、面倒な女子達を纏めるのも得意だったし、間違ひなく学年でも面倒な女子に数えられる相原さんとか新村さんとか愛美、比奈、わたしも仲良くできている。

それなのに羨ましいと思わないのは、渚紗も必死だと知っているから。先生達からの評判が良くても、任されたことがうまくいかないと叱られているところをたまに見たし、「頭はっかり良くてね」と笑われているのを聞いたこともある。褒められるたびにハードルが上がっていつかいるようだった。これができたんだから、これもできるはず。そんなふうに、渚紗の知らないところで渚紗の評価は独り歩きしていつかいた。

わたしと違って意見をはっきりと伝えることのできる渚紗は、できないことは断っていたけれどちよつと無理をすればできる程度のことには引き受けてしまっていて、おまけに人より無理できる範囲が広い。だから、渚紗のことなんてちつとも羨ましくない。

じゃあ、そもそもわたしは、誰かを羨ましいと思っているのだろうか。妙に寝つけなくて、そんなことをぐるぐると考えてしまう。比奈のことはどうだろうか。

比奈は面倒な子ではあるけれど、頭が良く、それよりずっと人付き合いがうまい子だ。見掛けほどではなくても気が強い彼女は、いろんな人とぶつかりながらも息苦しくない生き方ができる。気遣いはなんとなくずれているし、そういうところが渚紗は好きではないみたいだけれど、わたしはそうでもなかった。確かに面倒だけれど、比奈は、比奈を褒めているうちは庇ってくれる、そういう優しさを持つ子だった。わたしはきつと、彼女を利用していいのかもしれない。渚紗と一緒に行動することで誰かの親友という立ち位置を、比奈に文句を言われながらも付き合うことで比奈という風除けを手に入れていいのかもしれない。そう思っていることに罪悪感を感じるくらいには、わたしは比奈を好きでいるけれど、やっぱり羨ましくは思っていない。あんなふうにとぶつかってばかりだと、そのうち取り返しがつかないくらい傷ついてしまいうから。

じゃあ、愛美のことは？ そう訊かれると、簡単に答えられる。ちつとも羨ましくない。

愛美は可愛い。「愛するに美しいと書いて、エミです」なんて笑顔で自己紹介できる子は初めて見たけれど、実際、そんな自己紹介が許されるくらい可愛い。いつも笑顔だし、比奈になにか言われても渚紗に嫌味みたいなことを言われても笑顔でいられる。多分、笑顔で誤魔化しているんだと思う。なんにも感じないなんてことないはずだ。比奈も渚紗も言い方がきついついときがほとんどなのに、愛美は「また始まった」と笑って流している。そのことはすごいと思っても、ああやって笑顔で誤魔化していける愛美を羨ましいなんて思えるはずがなかった。

お母さんはいつも、「尊敬できる人を友達にしなさい」なんて無茶な

ことを言う。いろんな本で読んだことはある言葉だったし、学校の先生も、「友達を尊敬しなさい」などと言ってきたから、間違っではないんだと思う。でも、間違っではないだけだ。わたしは比奈も、愛美も、渚紗も尊敬していない。だけどこの三人は心から友達と言えるし、それだけでは駄目なのか。そこまで考えて、ようやく少しだけ眠くなった。眠気の前ではこんなことどうでもいいから、このまま寝てしまおう。この土日は朝から塾の予定だから、いつもみたいにお昼過ぎまで寝ているわけにはいかないのだ。

月曜日、愛美は学校を休んだ。渚紗はあんまり心配していないみたいで、そういうところドライブだねと言いかけた言葉を飲み込む。小学生の頃はそうでもなかったから、渚紗はどんだん冷たくなっていく気がした。ただ、ブックカバーに気づいてくれたのは嬉しかったから、もしかしたら渚紗は愛美のことが好きじゃないだけなのかもしれない。新村さんになにかを言われて愛美のロッカーに手を伸ばした渚紗を、なんとなく、寂しい気持ちで見ている。

火曜日も愛美は学校を休んだ。二日続けて休むなんて、やっぱり風邪なんじゃないかな。そう思ったけれど、渚紗も比奈もそう思っているわけではなさそうだった。わたしは二人ほど愛美を知っているわけではないので、適当なことを言ってお茶を濁す。比奈は渚紗に、もしかしたらわたしに機嫌を損ねたみたいだけれど、イチゴオレを飲むうちに頭も冷えたらしい。良かった。

わたしは月曜日火曜日、愛美がいなくてもいつもと同じように過ごしていた。渚紗みたいに勝手に愛美の持ち物に触ることもなければ、比奈みたいにしつこくラインしたりもしない。そもそもわたしは、愛美にグループ以外でラインを送ったこともなかった気がする。特に話題が見つからないんだから仕方ない。だいたい、愛美のラインは同じ話題を繰り返している気がするから、あんまり好きになれない。昨日見たテレビの話、芸能人のニュース、同級生の恋愛模様。最近だとそこで比奈が塩田君のことをついつい、愛美は逃げて終わり。そもそも、比奈は本気で、塩田君が愛美を好きだと思っっているのだろうか。塩田君が好きなのは相

原さんなのに。本気で勘違いしているんだとしたら、噂話が好きなわりに人を見る目がないなって思う。塩田君はあんなに相原さんのこと話題にしているのに、知らないのかな。もし、愛美をその気にさせて告白でもさせようっていうのもあるかもしれないけれど、そうだとしたら比奈の性格が悪すぎると思うからありえないはず。比奈は愛美を雑に扱ってはいるけれど、わたしにとって一番の親友が渚紗であるように、比奈にとつて一番の親友というのは愛美だ。そんな意地悪はほしくないはず。

今日は水曜日。愛美は笑顔で登校していて、比奈は満足そうにしている。渚紗は忙しそうにしている。文化祭が近いから、渚紗も、先生からいろいろ頼まれてはたばたしているらしい。なんの委員会にも入っていないのに、たまにわたしより忙しそう。頼られるっていいことばかりではないなど、わたしは渚紗を見て学んだ。正直者が馬鹿を見ろという言葉を知ったのも渚紗を見ているうちのことだったから、わたしの中で渚紗は、真面目で正直者で、いつも損をしている存在でもある。

「あ、鈴子、悪いんだけどこれ配っておいてくれる？」

「うん、いいよ。……なんか渚紗って、委員長みたいになってるよね」

思わず笑ってしまうと、渚紗もつられて笑ってくれた。

「もう学級委員とかそういうの、やりたくないんだけどね」

お昼休みも終わる時間なのに、渚紗はまた教室を出て行った。愛美と比奈は、そんな渚紗にも留めずにお弁当を食べている。結局、四人で食べていない以上、ばらばらで食べているみたいなのに、なぜか四人が登校しているとグループで纏まってお昼休みを過ごしているっていうのは、ちょっとおかしい気もした。

「渚紗どしたの？」

「さあ……文化祭近いから、先生に頼られてるみたい」

細かいことを説明するのも面倒だし、説明したところで比奈達は興味もなさそうだから端折ってやった。案の定、比奈は「ふうん」の一言で済ませている。

「よくやるよね、渚紗。えらいい」

愛美は興味なさそうなりに頑張って言葉を捻りだしたみたいだけれど、言い方が嫌味っぽくて苦笑してしまいそうになる。愛美はこういう

とき、孤立しないように頑張って言葉を探すことが多いけれど、黙っていた方が孤立しないときも多いと思う。そういうところは、相原さんがよく心配していたな、なんて、思い出したところで誰に話せるわけでもないことを思い出した。今度、いつか、相原さんと話すことがあれば愛美は変わっていなかったよと一緒に苦笑しよう。

「鈴子は今日委員会とかつてないの？」

「次は金曜かな……他の委員会にいろいろやつてもらって、その間はわりと自由かも」

比奈達は口では気にしながら、文化祭なんてまったく興味ないらしい。みんながそうだから、わたしも面倒がつているようなことを言ってしまうけれど、本当は文化祭を楽しみにしていた。その準備だって楽しい。文化委員に名乗り出たのも、周りには「勉強は苦手だから、こういうことで内申とか上げたいんだよね」なんて言ってしまったけれど、本当は文化祭の準備をしたかったからだ。比奈達にそんなことを言えば、変わっているとか囁立てられそうだったから言わなかったけれど、渚紗には言ってもいいかもしれない。チャイムが鳴っても戻ってこなかった彼女のことを考えながら、わたしは自分の席に戻った。

「渚紗って、昔はよく学級委員してたよね」

渚紗とわたしの家はそれなりに近くて、なにもなければいつも二人で帰っていた。今日も、わたしは委員会がないし渚紗も放課後は先生に使われなかったから、一緒に並んで帰っている。お昼休みのことを思い出して話を振ると、渚紗は苦笑した。

「まあね。あのときは楽しかったけど、高校の学級委員は大変そうだし」

「渚紗ならできそうなのに」

「そうかな、自信ないな」

渚紗ならなんでもできそうだと思うながら、これが、大人が彼女に向けている気持ちなんだろうと納得した。だから、彼女が話題を変えて、すんなりそれを受け入れる。

「文化祭、楽しみだね」

それがただの話題を変える方便なのか、本心なのかは分からなかった。

「そうだね。あ、渚紗の担当って買い出しだけ？」

「一応そうだけど、手が足りなかったら売り子もするよ。うちのクラス、部活やってる子多いしね」

「そっか。時間できたら、一緒にいろいろ見てまわろうよ」

言いながら、そんなことできないだろうとは思っていた。渚紗はやっぱ忙しいだろうし、時間ができたら、比奈、愛美、渚紗、わたしの四人で、比奈の行きたいところに行くに違いない。わたしはそれを嫌だと思ふけれど、渚紗はきつと、なんだってどうでもいいから、なんだかんだ楽しめるんだと思ふ。

「いいよ、約束」

約束してくれても、叶えてくれるとは限らないなら意味ないんじゃないかな。言えなかった言葉を押し込んだ。渚紗に対しても自分の気持ちを言えないなんて、いつ頃からこうなってしまったんだろう。それでも、渚紗は、わたしの友達だ。渚紗はいつもなにかを誤魔化しているみたいだし、わたしもなかなか自分の本音を言えないけれど、昔からずっと大事な友達だ。普通の友達がこういうものなのか、まだ分かっていないけれど。

そういうえば、比奈も愛美も、よく普通という言葉を使う。渚紗が使っているところはあんまり聞かないし、わたしにはなにが普通なのかは分からないけれど、二人ともどういいう気持ちで普通と言っているんだろう。分らないまま、わたしは曖昧に笑ったり頷いたりしている。

「じゃあ、また明日」

横断歩道を渡る渚紗を見送って、今日のグループトークは文化祭の話題なんだろうなと思った。先生からいろいろ用事を押しつけられている渚紗は質問攻めだろうと確信して、今日もわたしはスマホの電源を落として寝ようと決意した。

## 終章 とある男性から見た場合

改札口で彼女と待ち合わせしながら、行き交う人々を見るときもなしに見ている。五時前という、夕方にしてはまだ早い時間のせいか高校生がちらほらと見えて、懐かしいような気持ちになった。俺も去年まではあややって、制服を着て延々と立ち話をしていた。クラスの女子達がわざわざコンビニで飲み物を買ってまで長話をしていたのは驚いたけれど、今の女子高生も同じことをしているらしい。

「結局、愛美って塩田君のこと好きなわけ？」

「違うってば……ほんと恥ずかしいからやめてよ」

やたら声のかい子がエミちゃんをからかって遊んでいるのを見ると、ますます女子高生はみんな同じだなと思ってしまう。俺が高校生だったときも、声のかい女子はあややって誰かをからかっていた。そういう女子のいるグループには決まって、チャラチャラした女子、おとなしそうな女子、スカした女子がいたけれど、彼女達もそういうグループだった。柱にもたれてスマホをいじっているスカした女子の隣で、おとなしそうな子は視線のやり場に困っているようにきよるきよるしていた。

「でもさあ、愛美に彼氏とかできたら寂しくなるね。今みたいに遊ばなくなるでしょ」

「そんなことないよ。彼氏と友達は別じゃん」

「別だよー、別だから遊ばなくなるんだよ」

「そんなことないってば」

あるんだなあ、そんなこと。

エミちゃんがどうだか知らないけれど、実際、彼氏ができた女の子っていうやつは女友達との付き合いが悪くなるっていうのは、よく聞いたしよく見た話だ。俺の彼女もやっぱり友達との付き合いが減ったらしく、「彼氏いない子とは遊びづらいし、旅行もなんとなくしなくなる」とか言っていた。俺は彼女のいない奴とも平気で遊ぶので分らないけれど、立ち位置で振る舞いが変わるのは世の常だ、そういうことなのかもしれない。高校生のうちからそんなことを考えているとは、女子というのは世知辛いものだ。

「比奈だって彼氏とかどうなの？ こないだ、林君に告白されてなかった？」

「え、知ってたの？ 思いっきり振ってやったけど」

「なんで！」

「あいつ忘れ物多いじゃん、なんかそういうの無理」

ハヤシ君かわいそうすぎない？ 忘れ物多いくらいでフラれんの？ まじで？ 審査が辛すぎる、もっと優しく評価してあげてほしい。まったく知らない男子高生に同情してしまった。そのハヤシ君というのも、まさかそんな理由でフラれると知っていたら持ち物には気をつけていたに違いない。辛辣すぎる。エミちゃんも絶句しているらしい、「うわ……」と、相槌を打とうとして失敗していた。

「厳しいね、比奈」

エミちゃんのフォローをするように口を開いたのは、スマホを眺めていた女子だった。スマホをポケットに入れると、腕を組んで笑う。仕草がおとなっぽくて、なんとなく子供っぽい声のエミちゃんとはいい対比だった。

「だってさあ、持ち物にも気をつけないんだよ？ 全体的に雑そう」

「結婚するわけでもないんだし良くない？」

「良くない！ 渚紗だって厳しそうじゃんか、ずばり理想のタイプは？」

「じゃあ、スポーツ万能な人」

「適当すぎ！」

ナギサさんは飄々と答えて、「スズコは？」と、それまで口を挟めなかったスズコちゃんに話を振った。纏め役らしい。リーダーはヒナちゃんんで纏め役はナギサさんというバランスらしいけれど、バランス悪いなど見ていると思う。

「えー……考えたことなかったけど……、明るいい人かな」

引っ込み思案っぽい子だったので、まあそんなところだろうかと納得した。見ず知らずの女子高生を観察しているようで自分でドン引きしているものの、高校時代を懐かしんでいるということまで許してほしい。やっぱり男女問わず、恋バナすると好きなタイプの話になるよなあとしみじみしてしまう。俺もよく盛り上がった。俺は背の低い女の子が好きだっ

たのに、彼女にしたのは背の高い子なので、理想と現実は違々と恋愛で知った。

「愛美は塩田君が理想？」

「違うって言うてるのにー！」

頬を膨らませてむくれるエミちゃんは、本当にシオダ君のことを好きなのか。そしてシオダ君はエミちゃんを好きなのか気になった。さつきナギサさんは「結婚するわけでもないんだし」と言っただし、確かにそうかもしれないけれど、高校生の恋愛といっても真剣なのだ。下手すると、結婚が見えているから打算が絡む場合のある恋愛よりもまっすぐで真剣かもしれない。俺は高校生のとき好きだった人にまっすぐ相手になれなかったから、こうして茶化されている人を見ると、どうにも肩入れしてしまう。今のところ、忘れ物が多いという理由でフラれたハヤシ君に感情移入してしまっている。思い出せば俺も忘れ物が多かった。というか、今でも多い。やばいぞ俺、もしかして彼女からの突然のお誘いはデートではなく別れまじょうの話し合いかもしれない。感情移入はしているし肩入れしてしまうものの、別にその立ち位置になりたいわけではない。

「でも渚紗、桜井君と仲良さそうだったのってなんで？ 今日とかめっちゃ話してたよね。桜井君ってスポーツ万能だった」

「文化祭の片付け手伝ってくれてたから、そのお礼してただけ。比奈は恋愛に結びつけすぎ」

「あれ絶対に渚紗のこと好きだよー、まさかあたし達の中で最初に彼氏できるの渚紗？ 愛美、負けてらんないよ」

「今日はエンジン全開だね、どうしたの？」

どんな話を進めるヒナちゃんに対し、ナギサさんは冷静に返している。エミちゃんは拗ねたように黙って、スズコちゃんは曖昧に笑っている。仲がいいなと思っただけで微笑ましくなったが、女子というのはやっぱり似た者同士で固まるんだなとも思った。全員なんとなく恋バナが好きで、鞆に付けられているのはお揃いのクマのマスケット。女子ってなんであんなにお揃いが好きなんだろう。お揃いで選ばないのはお菓子くらいなんじゃないか。しかも、そのお菓子も分け合うこと前提で選ぶし、まったく分からない。ただ、分からないなりに理解を示しておかないとフラ

れるというのは、先月同じ専攻の奴で学んだので俺は口出ししないでこう。女子の世界もいろいろあるらしい。男子はそんなことないのにおもうのは、俺の傲慢だろうか。

「お姉ちゃんに彼氏できたらしくて、なんかはしゃいでるんだよね。それであたしもはしゃいでるのかも」

「あー、それは仕方ない。家にいるとずつと惚気？」

「そうそう、ずーつと惚気！もう聞き飽きたってくらい！」

「なにそれ気まずい」

ヒナちゃんの謎のテンションに納得したらしいナギサさんは、面倒臭い感じがいらしい。俺だったらしつこく恋バナ追及されて理由が身内の惚気に当てられたとかだったらキレている。エミちゃんも、「そんな理由なの？」という不満をあらわにした。

「えー、怒った？」

「怒ってないけど……」

ヒナちゃんは何事もはつきりさせたい性格らしいけれど、エミちゃんは違うらしい。はつきりしなくても納得させてあげればいいたきもあるので、そういうことだろう。特に女子は納得できればいいという子は多い気がする。少なくとも、俺が高校生だった頃、クラスの女子には多かった。そしてそういう女子はだいたい、エミちゃんみたいなチャラチャラした可愛い子だった。

「ていうか、桜井君って彼女いるよ」

「なんだ、そうなんだ。それならそれで早く言つてよ」

「言う隙がなかったんだって、比奈が捲し立てるから」

ヒナちゃんとナギサさんは特に親しいのか、ほんぽんと会話が成立している。反対に、スズコちゃんもなかなか話に入っていけないし、エミちゃんもそんなスズコちゃんをフォロワーしきれずにいる。結局ナギサさんが、ヒナちゃんと話しながらエミちゃんのフォロワーをして、スズコちゃんを会話に入れてあげている。もしかするとナギサさんは大変なボジションにいないのだろうか。頑張つてほしい。こういう子がいるグループは貴重だ。

ぼーっと眺めながら、全員が少しずつ似ているのかもしれないという、

女子のグループを見るたび出てくる感想を持つてしまった。同じものを

好きになって、同じ話題を繰り返していくグループは、同じ教室にいた

頃は鬱陶しかったけれどこうして他人として見ると微笑ましい。特にこ

の四人は、理想の男子がそれぞれ違ったのが面白かった。ナギサさんは

その場しのぎに答えたようだし、スズコちゃんも、なかなか思いつかな

かった上、適当に答えたんだろうけれども。そういえば、よく見ると靴

についたマスコットの色は、微妙にイメージと違った。エミちゃんの靴

には黄色のクマがついているけれど、外野から見た彼女のイメージはピ

ンクだ。ナギサさんの靴のクマがピンクで、スズコちゃんが青。昔、俺

の先輩が、青の好きな女の子は可愛い子が多いと言っていたけれどどう

なんだろうか。それはともかく、ヒナちゃんのクマは紫だった。それぞ

れちよつと薄い、パステルカラーとかいうやつっぽくて可愛いけれど、

色に気づけば少し違和感が勝ってしまう。どうやって選んだのか。好き

な色なのか、それとも早い者勝ちだったのか。

「比奈が彼氏つくれば、お姉さんの惚気に負けずにいられるんじゃないか？」

「？」

「でも林君は絶対じゃないから。あれはありえないから。それならまだ桜

井君の方がいい」

「あんまり理想が高いと大変だよ」

「そもそも、この中で一番理想高いのは愛美でしょ」

ヒナちゃんはなにか言われるたび、エミちゃんに話を繋げている。ぶつ

ちやけそれもあって、スズコちゃんがなんとなく置いてきぼりのように

なっているけれど、気づいているのだろうか……気づいてなさそう。あ

あいう女子は気遣いが下手だったりズレていたりする。話をふられたエ

ミちゃんは、今度は否定しなかった。

「そうかも……白馬に乗った王子様じゃなくていいんだけど、わたし、

面食いなんだと思う」

「自覚あったんだ……」

「昔好きだった人がイケメンだったんだよ、従兄妹のお兄ちゃんなんだ

けど」

「わたしも実は、従兄妹のこと好きだったときあるよ」

「まじで!? 結構あるのかな、そういうのって」

しかし、さつきからずつと恋バナでよく飽きないなと素直に感心した。しかも、さつきまで会話に消極的だったスズコちゃんもばっちり発言できている。そんなに初恋というものは神聖というか、特別なものなんだろうか。俺の初恋はすっかり忘れてしまったので、これはもう男女で感覚が違うというやつなのかもしれない。エミちゃんとスズコちゃんも、いかに従兄妹のお兄ちゃんが素敵だったか、夢中で語り合っている。類は友を呼ぶという言葉を思い出さずにはいられなかった。

「渚紗は覚えてる? 初恋」

「いやまったく……比奈も覚えてなさそう」

「うわ失礼。確かに覚えてないけどさ」

話の花を咲かせているエミちゃんとスズコちゃん、それを見ているヒナちゃんとナギサさんという、さつきまでとは真逆の構図になった。こういうことは珍しいらしい、二人で顔を見合わせていたけれど、最終的には見守ることを選んだようだ。二人で同じ柱にもたれている。どうでもいいけれど、面食いのエミちゃんがそこまで好意を疑われているというのなら、シオダ君とやらはイケメンに違いない。正直、同級生の女子の恋バナに登場しているのは羨ましい。

そのうちスズコちゃんがスマホを見たあとと帰路につき、そこで解散の流れになった。女子って一人が帰るとみんなが帰るんだから、連帯感が強いとかなんというか。あれはいつたいどういう心理なんだろうか。誰かの行動につられたり、誰かの行動が基準になっていた。それぞれなを考えているのかまったく分らない。だから女子グループというもののは苦手だったし、たまに、意外と残酷な中身を覗いて後悔することもあった。ただ、それでも彼女達は似た者同士で友達だというのなら、その友情は誰かの行動につられただけという残酷なものではない、綺麗なものであってほしいなどと、友達少なかつた俺は思ってしまうのだ。それは見ず知らずの女子高生グループも例外ではなく、女子高生のときから遅刻癖を持つ彼女を待つ間、彼女達の後姿に苦笑した。

## あとがき

わたしが卒業研究に創作小説という形を選んだのは、まず、大学生活の四年間を締め括る最後の課題として、幼い頃から慣れ親しんだ形を選びたかったためでした。

絵本や小説を読むたびに、わたしはその続きを夢想してきました。わたしが幼い頃、文学に興味を持ったのも、結末を迎えたそのあとを夢想することができるといふ楽しみがあったからに他ならないと思います。気づけば自分の世界を表現する楽しみに浸かっていたし、日本語をもつと勉強したいと思ったのも、その創作活動に生かしたいという理由からです。つまり、創作小説は、わたしがこの大学を選んだきっかけのひとつでもあると言えます。

高校生の少女達を題材としたのは、思春期の少女特有の感情の起伏の激しさは創作のテーマとして面白いのではないかと思ったという理由と、世間で言うところの「量産型女子」に対するわたしの考えなどを纏めたかったという理由が挙げられます。量産型女子と揶揄されても、彼女はそれぞれ別の人間なのだから、まるきり同一であるはずはない。周囲から浮かないようになど理由は様々だが、無理をしても合わせている人もいるだろう。そう思い、外から見れば似たり寄ったりの少女四人と、彼女達それぞれの内側を書きました。

創作小説はほとんどの場合、それを書いた者の価値観などが投影されてしまうというのがわたしの持論でした。それが意図的なものもあれば、そうでないものもあります。この大学生活で学んだこと、触れたこと、わたし自身の友情観などがどれほど投影されてしまうのかは未知数ではあるものの、そうした作者の投影も含めて創作小説を楽しんだ身として、自分なりの文学と向き合うことのできた、非常に充実した二年間となりました。執筆にたいへん協力してくださった山本淳子教授への感謝を以て、この卒業研究を締めさせていただきます。